異文化と心通わせ

つくば通信 ㊹

村田　佳子

朝ご飯から見えるもの

出張先の名古屋で、同僚との打ち合わせも兼ねて朝、喫茶店に寄ったときのことです。都心駅前の今風の「カフェ」ならまだしも、名古屋の住宅街にある喫茶店がラッシュアワーを少しすぎた時間にとても混雑していたので驚きました。カランカランと音のするドアを開けると、店内はボックスシートが壁に沿って6つ、古くて小さな本棚には誰かが読み終えたスポーツ新聞や雑誌、その奥には懐かしいテーブル型ゲーム機が3台ありました。同僚と私は短い時間コーヒー1杯飲むのに並ぶのもなあと思いあきらめようとしたのですが、ほかに店も見当たらず、時間もなかったので、1カ所空いていたテーブル型ゲーム機でコーヒーを飲むことにしました。

まもなく「お待ちどおさまでした」という声と共に運ばれてきたのは、トースト、バター、ゆで卵、小さな袋に入ったスナック、そしてコーヒーでした。ほかの人の注文と間違ったのかと思い、「あの～」と言いかけると、名古屋に慣れていた同僚が「名古屋では朝、コーヒーを注文するとドリンク代だけでモーニングといったセットが出てくるのが普通なのだ」と教えてくれました。

朝ご飯は済ませていたので、食べ切れませんでしたが、店内を見渡すと、平日の朝、皆喫茶店で朝ご飯を食べています。出張先として人の出入りが激しい土地柄というのは分かりますが、どう見ても近所の常連さんという感じです。名古屋は味噌カツや味噌煮込みうどんなど独特の食文化があり、いつも訪れるのが楽しみな土地なのですが、モーニングという新たな名物を知り、また行くのが楽しみになりました。

朝ご飯を外で食べる、と言えばお隣、中国から来日した20代のエンジニアの女性もこんなことを話してくれました。彼女は通勤する途中の市場や通りの屋台で肉まんやシュウマイを買い、食べながら自転車で職場に向かうのだそうです。朝はぎりぎりまで寝ていたいからと笑いました。日本では朝、ゆっくり寝たいから朝食を抜く人が増えている、なんていうニュースも聞いたことがありますが、蒸したてホクホクの肉まんやシュウマイにかぶりつきながら自転車をこいでいる人が大勢いる風景は想像しただけで圧倒されます。蒸し器から湯気の立つ通りや肉汁の匂い、活気に満ちた朝なのでしょう。中国人のパワーは食から、そして朝ご飯からきているんじゃないか、なんて思いました。

私も大学時代、水泳競技の強化練習で中国のナショナルチームと寝食を共にしたことがあります。そのときも選手の朝ご飯に驚きました。大学での合同練習だったのですが来日した各選手が1週間、私たち学生のアパートに宿泊したのです。私の部屋にも当時、中国でトップクラスの自由形の女子選手が泊まったのですが、朝起きて私はパンやご飯を少しだけ口にして練習に向かうほうだったので、彼女もそうかと思い用意しようとしたら、持参のラーメンをゆでて食べていました。

「朝からラーメン?!」しかも結構な量です。（これ、食べると調子いいんじゃないの?!）そう思った私は次の日、まねして麺をもらい食べてみました。消化しきれないラーメンとの戦いで気持ち悪く、練習どころではありませんでした。私はご飯がいいと感じたものです。

その土地ならではの食文化、朝ご飯という誰もが経験する短い時間からもその土地の人々とその暮らしを垣間見ることができそうです。

（鶴岡市出身、JICA筑波国際センター・クリニックコーディネーター）